

高山社で養蚕を学ぶ

高山長五郎（1830～1886年）は、1860年代後期、自身が考案した蚕の飼育法を教授し始め、1884年には正式に、高山社養蚕学校を設立した。彼はその後、町田菊次郎（1850～1917年）に学校を渡した。そして1887年、長五郎死没の翌年に、菊次郎は会社と伝習所を、高山村から藤岡町内へ移転した。

高山社養蚕学校の教育は、2つの異なるコースから成り立っていた。1つ目の本科は3年制のプログラムで、年間を通じて開講される授業の中で理論と実技を教授した。本科プログラムの学生たちは、藤岡にある学校に住み、授業料を支払うように要求された。本科プログラムでは、養蚕のほか、科学、数学、日本語などの学科科目も教えられた。第3学年の1月から3月まで、学生は蚕の成長と絹生産の理論について学び、その後、最終試験を受けた。

もう一つのプログラムは、2～3年制の特別プログラム、別科で、4月から7月（春の蚕研修）と7月から9月（夏と秋の蚕研修）に開講された。別科プログラムは、授業料の代わりに、プログラム修了後、学生が学校に稼ぎの一部を支払うことになっていた。別科の学生のほとんどは、藤岡本校ではなく分校で教育を受けていた。1927年に閉校されるまで、藤岡の本学校には、台湾や朝鮮などの大日本帝国領から学生がやって来た。

分校

別科の学生は、分教場（分校）に通った。入学後、学生はグループ分けされ、グループ毎に蚕を飼育するよう義務付けられた。それぞれのグループには、蚕を生育する部屋があてがわれた。学生は、消費される桑の葉の量や産出される繭の数などのデータを注意深く記録した。高山社の職員が学生の仕事をチェックし、蚕の生育工程を監督した。トップクラスの成績を残した卒業生は、免許制の養蚕の指導者になるための試験を受けることができた。

別科プログラム出身の教師は、高山社の養蚕方法を指導するため、大日本帝国領の至る所に派遣されたり、分校の運営を担当したりすることとなった。分校の大部分は群馬県内に作られた。高山社の絶頂期には、群馬、埼玉、千葉、茨城の4県に116の分校があり、それに加えて、大日本帝国領の様々な地域に22の分校が位置していた。

女性と絹

日本では、4世紀に養蚕が導入されて以来、蚕を飼育したり絹を紡いだりするのには女性の仕事であった。しかし、高山社の本科プログラムに参加できるのは、女子部が1906年に作られるまで、男性のみに限定されていた。その後、女性も男性と同じ資格を取得して本科プログラムを卒業できるようになった。

一方、別科プログラムでは、ごく初めの時期から女性を受け入れていた。1867年に徳川幕府が倒れた後、多くの旧侍の家族は、生き残りをかけて絹の生産に取り掛かった。蚕の飼育に必要な技能を学ばせようと、息子や娘を高山社のような学校に通わせた。実技を重視した無料の分校は、授業料を支払う余裕の無い家族にとって最適であった。